

カ
ミ
ン
グ
ア
ウ
ト
・
レ
タ
ー
ズ

子
ど
も
と
親
、
生
徒
と
教
師
の
往
復
書
簡

はじめに

自分が同性を好きであることに気づいた子どもたちが抱える孤独感は、「異性愛が当たりまえ」な家庭のなかで、自分のその思いが家族と分かちあえないものだと感じることから始まります。「これは話してはいけないこと」「わかってもらえないわけがない」と思い、自分のありように、ひとり悩むのです。

性への関心が高まるころには、ゲイ/レズビアンである子どもの多くは、学校生活のなかで、自分とまわりの性的指向が違うことに悩みます。しかし、近くにいる大人たち——親や教師など——が、その悩みや苦しみに気づくことはほとんどありません。ゲイやレズビアンであること、そして、それにまつわる悩みや苦しみに思いが至り、受けとめられることは稀まれです。それどころか、同性愛にまつわる話題は、教室のなかで、からかいの対象としてあつかわれることも少なくありません。

その意味で、ゲイやレズビアンとしての子どもは「見えない子どもたち」、見えないことを余儀なくされた子どもたちなのかもしれません。

私たちは、そのかつて「見えない子どもたち」であったゲイ／レスビアンが見えるようになった（つまりカミングアウトした）道のりを、手紙のやりとりのかたちで記してもらい、それを残したいと思いました。

子ども時代に「話すのはやめよう」と思った彼／彼女たちは、どうして、話す（カミングアウトする）ことを選びなおしたのでしょうか。カミングアウトすることで、親や教師たちと、どのように関係を深め、絆を結びなおしたのでしょうか。

この本には、そんなカミングアウトをふり返る手紙、あるいはカミングアウトをする手紙と、それに対する返事がおさめられています。十八歳から八十二歳までの、子と親、生徒と教師の七組の往復書簡、十九通の手紙です。

それらはもちろん、個別の関係性のなかで書かれたものであり、ある意味で私信です。しかし、私信というかたちや個別の関係性を超えて、多くの人へのメッセージが含まれたものだとして私たちは考えています。

それは、家庭や学校にいながらいまも「見えない」ことを選ぶしかない子たちや、その子たちを愛しながらも抱きしめてあげることができない大人たち、昔そういう子どもだっ

たゲイ／レズビアンへ向けられたメッセージです。

そして、そんなこの本が、ゲイ／レズビアンにとどまらず、他のセクシュアル・マイノリティ、さまざまな「見えなさ」を抱えている子どもたち、どうやって子どもに語りかけていいか悩んでいる大人たちにも、力を与えられるものになってくれることを願っています。

RYOJI + 砂川秀樹

はじめに

RYOJI + 砂川秀樹

3

I 母へ、息子へ、娘へ——家族のなかのマイノリティ

Testament 母さん、あるとき泣いてたか

昌志(27歳) ↓ 母(55歳)

10

Testament レインボーマーチのある街で

伊井義弘(32歳) ↓ 母(58歳)

33

Testament 息子と世間と小説と

村上剛志(29歳) ↓ 母(56歳)

45

Testament 二十歳を迎える勇太へ

勇太(19歳) ↓ 母(59歳)・姉(33歳)

66

Testament はじめから私の答えはひとつ

イトータリー(56歳) ↓ 母(82歳)

79

カミングアウト・ストーリー1

岸田さん父子のこと

RYOJI

98

II 先生へ、生徒だったあなたへ——教室のなかのマイノリティ

Letter 6 「ムーミン谷とマイノリティ」レポートにこめたもの 侑子(18歳)⇩春野(44歳) 118

Letter 7 当事者であることを選ぶ、ということ 渡辺圭亮(25歳)⇩楠原彰(69歳) 134

カミングアウト・ストーリー 2

朝原さんの高校でのこと 砂川秀樹 154

III この本を読んでくれたあなたへ

座談会 なにがあっても、わが子ですもの——ゲイ／レズビアンの子をもつ親として 164

解説 カミングアウトを考えているあなたへ、

カミングアウトを受けたあなたへ。 砂川秀樹 195

おわりに RYOJI + 砂川秀樹 217

あなたと、その周囲の人のためのコミュニティリソース 229

I
母へ、息子へ、娘へ——家族のなかのマイノリティ

母さん、あのとき泣いてたか

昌志(27歳) ↓ 母(55歳)

「俺、ゲイヤねん」。永遠にも感じられた少しの沈黙のあと、

口を開いたのは母のほうだった。「……ほんまに？」。

カミングアウトから一年、息子と母とがふり返る「あのとき」とそれから。

昌志さんから母へ

母さんへ

あの日のことはもう親父も知ってくれてて、一応済んだ話やけど、ちゃんと書きたいんで。

何を伝えたかったのか、どんな気持ちでのカミングアウトやったのか。

カミングアウトを親になぜしたのか、俺にとってそれはどういう意味があったのか。

二人に心理的な負担をかけるその先に、何を期待してたのか。

言いつ放しはよくないと思うのもある。俺のなかでも、ちゃんとしておきたいというの
も、ある。

これはそんな手紙です。

もしよかったら、返事、書いてくれへんかな。

あの時どんな気持ちやったのか、今どんな気持ちでいるのか、本当のところを。

あの日、母さんを飯に誘ったよな。「話がある」とも言っただけ。でも「何の話？」って聞かれて答えられずにごまかして。だまし討ちみたいで嫌やったけど、電話では言えなかったから。ごめん。

店に現われたよそ行きの格好の母さんを見て、子どもの頃「お出かけ」が楽しみやったの思い出したよ。ええ匂いがして綺麗な母さんが、なによりも嬉しかったなあ。

変わらず綺麗やったから、俺はまた悲しませるのかとほんま苦しくなったよ。

でも、引き下がるわけにはいかんかった。それまでの二十年みたいに、俺がゲイやって

ことを知られたくないって理由だけで、俺なりに幸せなこと／悲しいこと／嬉しいことも分けあえず生きる人生を続けるのは嫌やったから。

俺が、母さんと父さんに完璧に嘘をついて生きていけるほど、器用やない限り。

俺は男が好きになるように生まれた。でも、それは小さな違いなだけで、俺が幸せになれへんこととは違う。俺はそれなりに幸せやったりもする……他の人と同じように。時々俺もつらいかも知れへん。他のみんながそうであるように。

そういう話も家族として思う自分がおった。親子でも分けあえなくてええことも、きつとあるんやろうけど、俺は、俺が幸せやということ、分からせてやりたかった。生んでもらって感謝してることを、伝える方法は他にないやろ？

正直、土壇場どたんばになっても迷った。めっちゃビビった。このまま楽しく飯を終わらせることもできる。幸せやっていう話は、「彼」を「彼女」に置き換えてもできるやないかと、思った。

でも「ごまかすなや」ってもう一人の俺が言った。「恥じてる気持ちがある限り、お前は自分を否定してらんや」ってな。